

氏名	Schmuckal, Colleen Christina
ヨミガナ	シュムコー、コリーン・クリスティナ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第295号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 三味線を用いた現代作品の分析的研究 ——独奏曲、合奏曲及び協奏曲における三味線の特性——

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	塚原 康子
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	植村 幸生
副査	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	小島 直文
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	松下 功

（論文内容の要旨）

本研究の目的は、三味線の特性がいかに表現されているかを、独奏曲、合奏曲、協奏曲において検証し、記譜法、技法と奏法、アンサンブルにおける役割に注目して、三味線を用いた現代作品の効果的な分析方法を解明し、提示することである。この分析を通して、西洋音楽と伝統的な日本の音楽とのベーシックな音楽理論の違いを比較するなかで、今日、三味線の役割がどのように捉えられ、楽器の本来の奏法や音色がどう表現されているのかを明らかにしたい。三味線が用いられた現代作品の意義を明らかにする上では、楽器の特性が非常に重要な視点となる。

楽器の特性とは、その楽器の歴史的・文化的背景に由来する奏法や記譜法、習得術などの諸特徴のことである。邦楽器はその種類によって楽器の特性が異なるため、現代邦楽作品を分析し、また作曲するには、音組織や旋律的な構造のみに注目するのではなく、楽器の特性に重きを置くことで更に興味深い結果が得られると考える。

三味線の特性を見定めるうえで、三つの重要事項、すなわち記譜法、技法や奏法、アンサンブルにおける役割、に注目する。三味線には多くの記譜法が存在し、記譜法によって三味線の種類、流派などの違いが明確になるため、現代作品において記譜法（五線譜を含む）は、その作品の表現方法や音楽的な構成を示す重要な手掛かりとなる。また、三味線は古来より様々な技法や奏法を発展させてきたが、音色、間とノリ、調子などを含む技法と奏法を分析することにより、作品中の各音の意味合いや作品全体の様式が明らかになる。アンサンブルにおける役割は、三味線が音楽史の流れの中でいかに表現の幅を広げ、現在に至ったかを明らかにする上で重要な鍵となる。

三味線の特性を細かく見ていくため、三味線の現代作品を三つのカテゴリーに区分し、そのカテゴリーごとに先駆的な三味線の現代作品の分析を進めた。

一つ目は三味線独奏曲である。ここでは、歴史的な文脈から離れた独奏における三味線の音楽的な役割を分析し、三味線の過去と現在の音楽的な表現方法を明らかにした。その上で、山田流箏曲の演奏者であり作曲家でもある中能島欣一（1904～84）の先駆的な三味線独奏曲《盤渉調》を主要作品として扱った。《盤渉調》（1941）は、数ある三味線独奏曲の中でも、旋律構成やノリが、特に三味線本来の技法や演奏表現に根ざしている点において際立っていた。

二つ目は複数の種類の三味線による合奏曲である。それぞれの三味線の担ってきた異なる歴史的な役割や奏法、音色の変化によって、どのように音楽が展開されるかを分析し、現代作品における異なる三味線の使用効果を明らかにした。ここでは、長唄三味線方であり作曲家でもある中島勝祐（1940～2009）の長唄・地歌・小唄・義太夫三味線を含む合奏作品《西鶴一代女》（1984）を主要なテキストとして扱い、現代作品における三味線の使用が表現の幅を広げることが示唆された。《西鶴一代女》（1984）は、作曲者が歌詞の世界観を音として具現化するために、それぞれの三味線の異なる奏法や音色により生み出される響きが音楽的な展開を作り出すことに重心を置いていた。

カテゴリーの三つ目は三味線協奏曲である。異文化の音楽や楽器を体験する手段として三味線協奏曲がいかに機能するか、三味線を西洋音楽的な枠組みの中でどのように表現させるのかを分析し、協奏曲の中で三味線を扱うことによる可能性や制約を明らかにした。そのためのテキストとして、日本音楽集団の作曲家である長澤勝俊（1923～2008）の先駆的な作品《三味線協奏曲》を扱った。この曲の分析を基に、オーケストラや吹奏楽による伴奏の場合、邦楽器による伴奏の場合、テンポが遅い場合、それぞれに生じる問題を解明し、初演者の役割や記譜法が協奏曲の作曲に与える影響を明らかにした。《三味線協奏曲》（1967）では、三味線が独奏楽器としても、アンサンブルの一部分としても機能していた。協奏曲において、三味線が独奏楽器としてアウトサイダー的な存在であるだけでなく、伴奏楽器との間に有効な関係性を作り出すにはなお改善の余地がある。三味線本来の表現を十全に用いれば、より興味深い協奏曲作品が生まれるのではないかと考える。

結論では、以上の分析を踏まえて、三味線を含めた民族楽器が、将来において単なるエキゾチックな楽器に留まらず、表現方法を広げて楽器固有の価値を高め、現代の音楽界に影響を与えるための展望を論じた。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、三味線を用いた現代作品において「三味線の特性」がいかに表現されているかを、独奏曲・合奏曲・協奏曲という3つの異なる演奏形態の先駆的作品を対象に詳細に分析し、明らかにした研究である。申請者は、自らの多年にわたる三味線の演奏・作曲の活動に立脚しつつ、三味線という楽器が「音色の変化」を表現の根幹とし、伝統的には歌に寄り添うアンサンブル楽器という役割をもつ点で、邦楽器の中でも特異な立ち位置にあることを探りあて、現代作品の分析におい

でも、「三味線の特性」に即して、とくに記譜法・技法と奏法・アンサンブルにおける役割の3点に着目すべきことを提示した。

本研究に顕著に見られる、担い手の視点や認識体系の重視、パフォーマンスの習得から得た知見の音楽分析への積極的導入などの諸点は、1970～90年代の北米における民族音楽学の潮流を基盤とするものであり、本研究はそれを三味線音楽に対して忠実に実行し、楽譜や音源、演奏者へのインタビューを含む多くの有効な資料を集め、的確な分析検証を行うことによって、これまで本格的な先行研究が少なかった現代三味線音楽の研究史に新たな知見を加えることに成功した。一方で、当時の民族音楽学の「伝統的」音楽ジャンル重視や、歴史性よりも体系性を重視する傾向は、現代邦楽作品がつねに「伝統的」な語法や技術に対する挑戦・克服の契機をほらみ、結果として短期間に多様な様式変遷や試行錯誤が混在し続けたという歴史的経緯に対する本研究での全方位的考察をやや閑却させたと言えなくもない。分析の鍵とした「三味線の特性」という独創的な概念も、楽器としての新たな可能性の開拓よりは、伝統に培われ身体化された要素の効果的活用に有意性を見出す方向に働いたとも言える。

しかし、留学生として、三味線の魅力をいかに伝えるかという課題に長く全力で向き合い、深い愛着をもって成し遂げられた本研究は、世界に発信されるべき独自の内容を有しており、今後も本人自身の手でさらに深めていくことが期待される。将来の三味線音楽の普及啓発という意味合いからも、きわめて有意義な成果であると高く評価できる。論述において、若干の用語の乱れとやや反復が多い点を除くと、日本語の本文が非常に高い水準で仕上げられ、明快で正確な議論を達成していることも特筆されるべきであろう。

以上を総合して、博士論文にふさわしい優れた成果を挙げたものと評価し、合格とする。